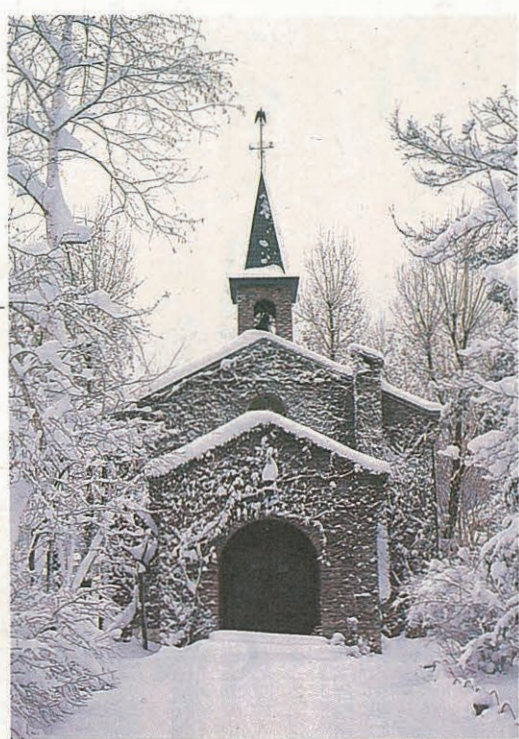




荻原 守衛 「女」
(碌山) 作
高さ 98センチ
(写真提供・碌山美術館)



煉瓦造り教会風の
碌山美術館の外景
(写真提供・碌山美術館)

「女」との出会い

— 安曇野・碌山美術館にて —

森井 暲

信州、北アルプスの山麓に、水と緑と広々とした大地に恵まれた安曇野がある。山国信州にこんな広い沃野があるのかと驚くほどである。ここが彫刻家・荻原守衛(碌山)の生まれ故郷である。守衛は近代日本の黎明期に生を享け、全生命を賭けて造形の本質を追求し、明治四十三年、三十二歳の生涯を閉じた。一人の人間の人生としては、三十二年はあまりにも短すぎる。だが個人にとって、時間は長短ではなく、あくまでも質的なものである。守衛が人と出会

いは、宗教(キリスト教)にふれ、人妻・黒光(相馬愛蔵夫人良)とのプラトニックな愛の相剋の中で苦しみながら、「愛は芸術なり、煩悶は美なり」という高みを彫刻「デスベア」や「女」に具現して去った年月には、決して数量的には測ることのできない永遠がある。「女」は守衛の絶作である。「女」は虚空を見つめながら、立ち上がろうと上体を起こしはしたものの、膝から下は地についたまま遂に立ち上がれない。口もとには内面の悶えをたたえながら、全身か

(法学部教授)

らは抗争が消え自然への随順が感じられる。それは守衛にとって終生の恋人ともいえるべき黒光の姿であると同時に、守衛自身の生涯を象徴するものだったのであろうか。
私が守衛の作品に初めて接したのは、日米安保条約の改定論議がまきびすしかつた頃である。大学キャンパスの喧騒から逃れ、修士論文の作成からも一時逃避して、一人信州の秋を旅していた。わさび田の畦を通り、道祖神を訪ねながら安曇野のすすきの中を穂高川に沿ってあてもなく歩いていった。ふと見ると、木造の穂高中学校の校庭に接して、周囲には緑一つない空地に、煉瓦造りの教会風の建物が一棟と一つだけ姿を見せていた。これが開館二年目を迎えたばかりの碌山美術館であった。ほとんど入館者もなく、受付の女子職員の人々が「今日はあなたで五人目ですよ」と教えてくれた。
二度目に碌山美術館を訪れたのは、今から十二、三年前の夏、学生とのゼミ旅行の時である。辺りの風景は一変していた。殺風景だった美術館の前庭には樹木がみごとに生い茂り、蔦に覆われた本館正面の大扉の中に若い男女がつきつきと吸い込まれてゆく。周囲には休憩所やみやげ物店も建って、観光バスが何台も駐車していた。聞けば年間二十万人を超す入館者だという。

私が守衛の「女」に惹かれるのはその芸術的価値によってではない。むしろそれとの出会いの異常さによる。孤独な旅の果てで、たった一人美術館の薄明かりの中に見た「女」の印象があまりにも強烈だったからである。それが生きた女性ではなかったにもせよ、出会いは人生にとって大きなエポックとなる。できることなら、たった一人でもう一度あの「女」に会いたいものである。



昨年毛利衛さんがスペースシャトルに乗って宇宙に飛び出し、宇宙のすばらしさ、地球の美しさを直接日本に送ってきてくれた。また宇宙授業によって子供達に大きな夢を与え、宇宙をより身近なものとして我々に与えてくれた。現在地球から約三三〇キロメートル離れた宇宙空間には数千個の衛星が回っており、通信衛星や気象衛星など直接我々の日常生活に直結しているものも少なくない。更にNASAではスペースシャトル計画が進行しており、二十一世紀には宇宙空間を人類の生産、生活空間としての利用が本格化しそうである。▼目先をかえて我々が今住んでいる地球に目を向けてみると、地球内部のことはわずかに十キロメートルの深さについてほとんど解かっていない。まして人間が直接生活空間として利用しているのはほんの数メートル程度である。地球の半径は約六三〇〇キロメートルであり、その大きさから考えるとごく表面の皮のみを探っているに過ぎない。近年地球環境に関する話題が多くなるのは、我々が住んでいる地球内部のことがあまりにも知らないことが多過ぎると思えてならない。地球を真に理解するためにも宇宙と同じくらい地下にももっと目を向けてほしいものである。(H.K.)

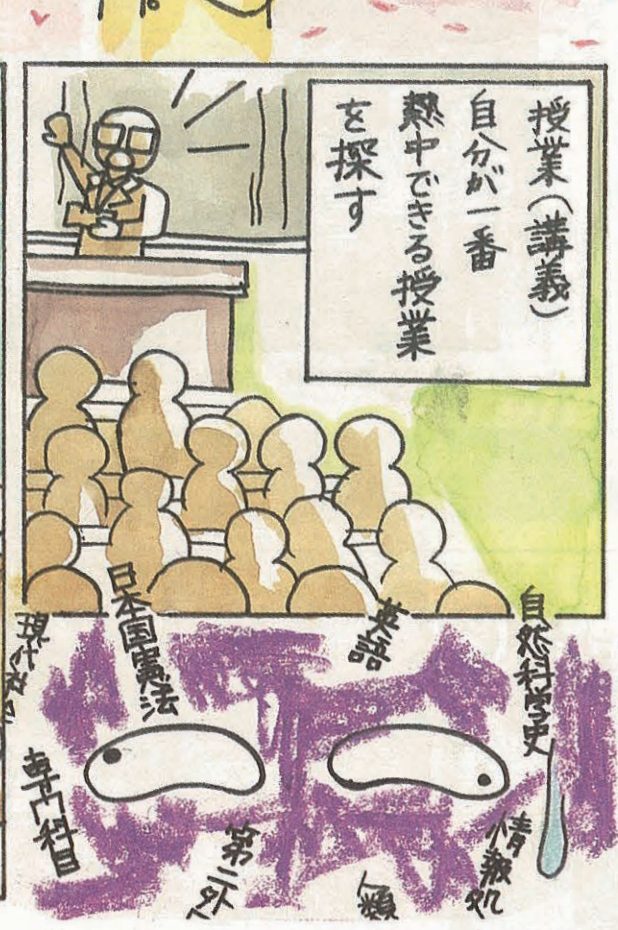
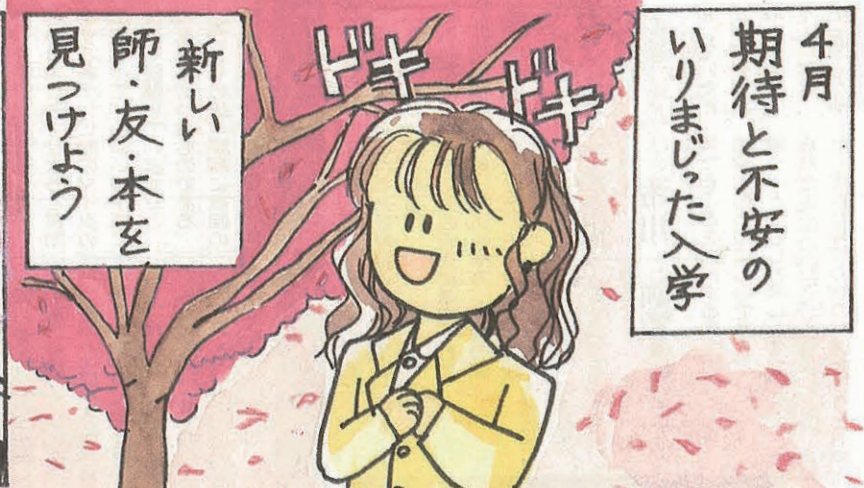
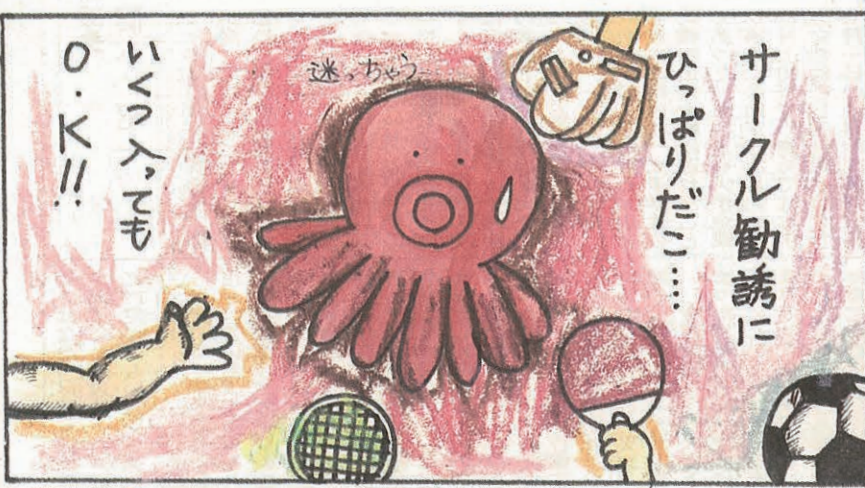
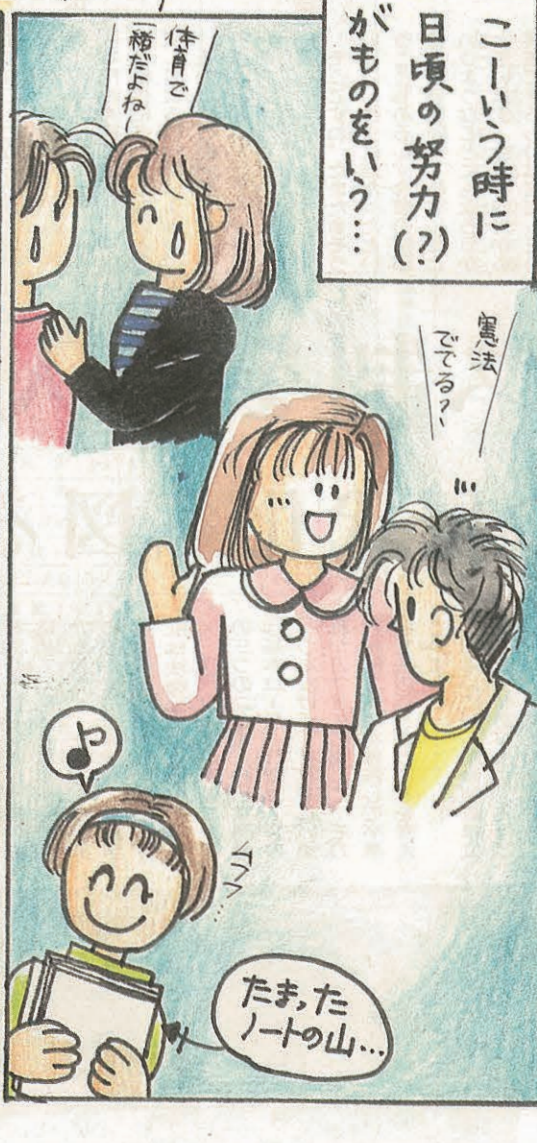
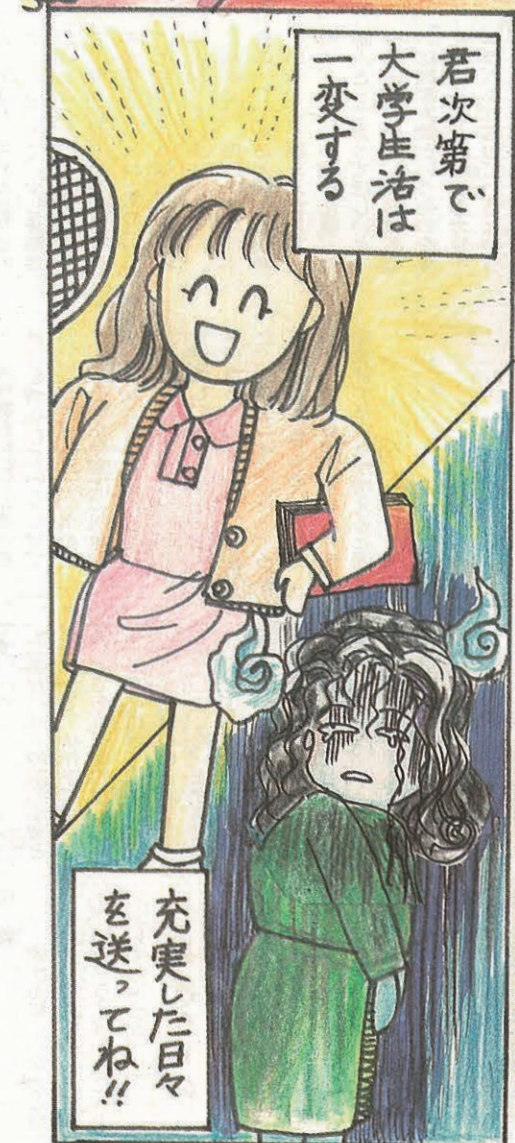
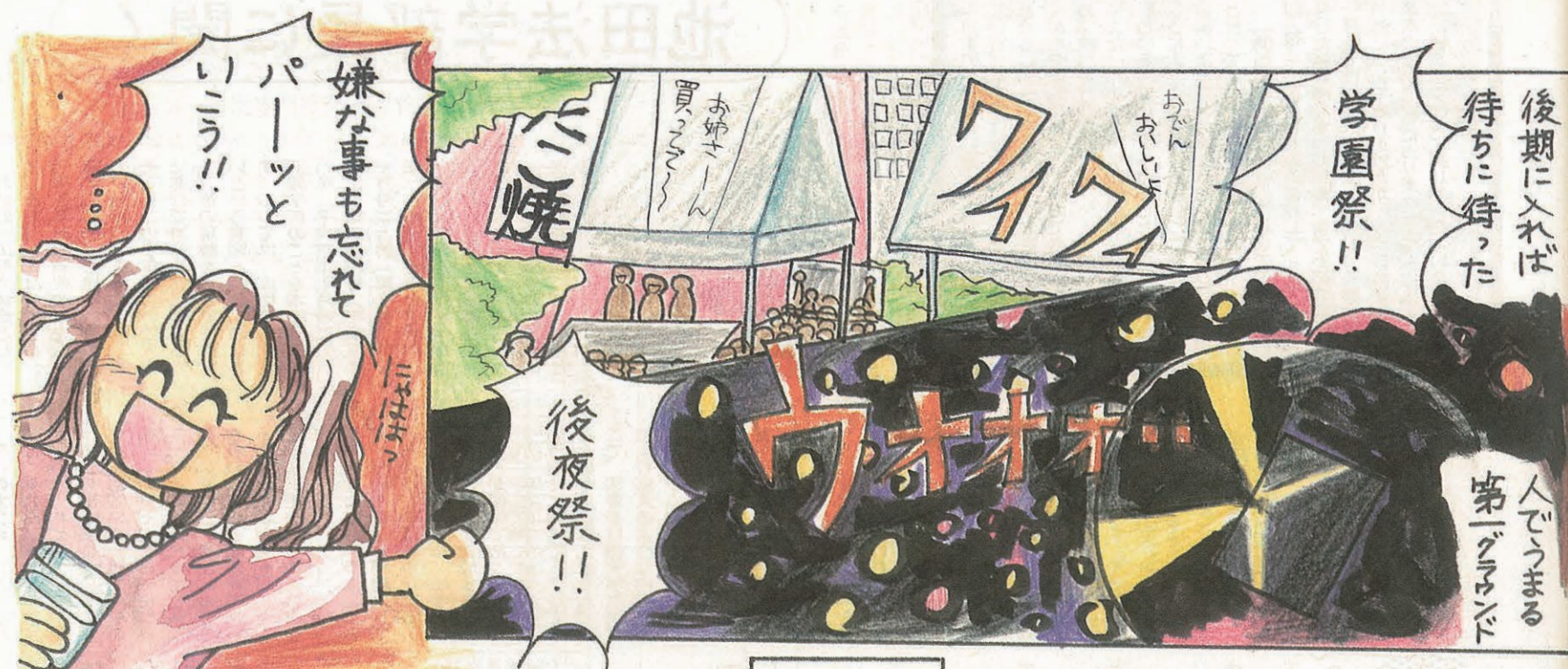
HEADLINE

- 2 面 受験生へのアドバイス
- 3 面 関大生の就職状況
- 4・5 面 CAMPUS LIFE '93
- 6・7 面 特集 法学部カリキュラムの改正
- 8 面 総合図書館への招待



CAMPUS LIFE '93

関西大学漫画同好会 KUMD



関西大学の歩み

【平成】

- 1・11 百周年記念会館竣工
- 3・3 高槻校地の造成工事竣工
- 4・4 百周年記念セミナーハウス・高香館竣工



【昭和】

- 2・3 千里山に大学本部本館竣工(昭和29年撤去)
- 3・4 千里山図書館・現簡文館 竣工
- 4・4 大学院を開設する
- 9 天学舎竣工し、専門部を移転
- 10・3 経済学部を経済学部と改称
- 23・4 新関西大学に移行、法・経済・文・商の四学部(全第1部・第2部)発足
- 25・4 新制大学院に移行
- 26・4 東西学術研究所を開設
- 28・4 第2部の全学部を天六学舎へ移転
- 29・4 考古学等資料室を開設
- 33・4 工学部(第1部)を設置
- 39・4 経済・政治研究所を開設
- 42・4 工業技術研究所を開設
- 43・4 社会学部(第1部・第2部)を設置
- 46・3 電子計算機室を開設(昭和57年4月情報処理センターに改組改称)
- 49・4 部落問題研究室を開設(昭和60年6月人間問題研究室に改組改称)
- 50・4 大学院設置基準による「博士課程の大学院」に改組
- 51・4 飛鳥文化研究所・植田記念館竣工
- 59・4 一般教育等研究センターを開設
- 61・4 総合図書館・情報処理センター竣工
- 62・4 創立一〇〇周年記念式典を挙行政学研究所を開設



【大正】

- 11・4 千里山に大学予科校舎竣工し、同年5月大正部 大学予科を移転
- 6 大学舎により関西大学として許可される。法学部(法律・政治の二学科)、商学部(商業学科)の二学部を設置
- 13・4 商学部を経済学部と改称
- 8 法学部を法文学部と改称し、文学科を増設(昭和3年4月開講)
- 15・8 千里山に大運動場(現第一グラウンド)竣工
- 10 クラブハウス(現以文館)竣工
- 第一回大祭を挙行政



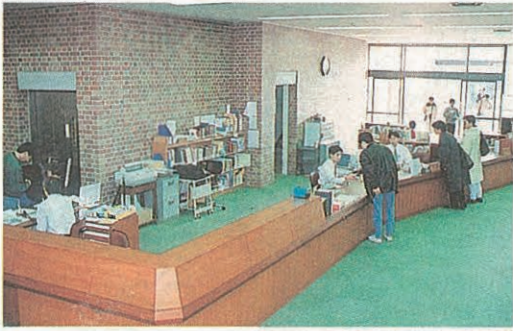
【明治】

- 19・11 大阪・西区京町堀・願宗寺において、関西法律学校を創設し、開講
- 20・4 大阪・北区河内町・興正寺へ移転
- 22・9 第一回卒業証書授与式を挙行政
- 36・11 専門学校令による専門学校として許可される。大阪市西区戸畑に江戸堀校舎竣工し、同年12月移転
- 37・8 経済学科を増設
- 38・1 私立関西大学と改称
- 39・9 商業学科を増設
- 12 大阪市北区上福島に福鳥学舎竣工し、移転





〈レファレンス室〉 総合図書館のメイン・フロアは、1階のレファレンス室である。ここにはメインとレファレンスの二つのカウンターのほか蔵書目録、新着雑誌、参考図書、新聞、複写及びマイクロリーダー等の各コーナーがある。



〈メイン・カウンター〉 図書館蔵書の大部分が、地下の書庫に収蔵されている。このカウンターでは、百数十万冊に及ぶ書庫内図書を利用者に提供するほか、図書館の総合案内の役割を果たしている。



〈レファレンス・カウンター〉 このカウンターでは、レファレンス室に備え付けの辞書・事典・年鑑・統計・書誌等の参考図書約5万冊を使って、利用者の資料相談に応じたり、文献資料の探し方を指導したりするなど、利用者と資料を直接結び付けるサービスを行っている。



総合図書館への招待



三階には異なった雰囲気をもつ読書空間が、東西に分かれて二つ設定されている。好みに応じて自由に座席を選べる仕組みである。



学部学生が最もよく利用するのは二階の開架閲覧室。中央エリアの辞書・事典・文庫本などを含めて、約十三万冊の学習用図書が諸君の利用を待っている。

〈開架閲覧室〉

学部学生が最もよく利用するのは二階の開架閲覧室。中央エリアの辞書・事典・文庫本などを含めて、約十三万冊の学習用図書が諸君の利用を待っている。開架閲覧室は、中央エリアのほか、西エリアの人文・社会系閲覧室と東エリアの自然・工学系閲覧室に分かれている。オンライン目録・AV・複写の各コーナーがあり、自由に使えるグループ閲覧室もある。

〈一般閲覧室〉

三階には異なった雰囲気をもつ読書空間が、東西に分かれて二つ設定されている。好みに応じて自由に座席を選べる仕組みである。



BOOK 新刊紹介

文学部教授 中山喜代市編著 『日本における スタインベック』 文庫書誌 (関西大学出版部 6000円) スタインベックは、日本でもよく読まれ、かつ論じられてきたアメリカ作家の一人である。

文学部教授 多田敏男訳 『ヘンリー・ジェイムズ短編傑作選』 (新潮社 3400円) ここに集められたヘンリー・ジェイムズの四編の作品「バンドラ」、「バタコニア号」、「コクソン基金」、「ジュリア・フライド」は、一八八四年から一九〇八年にかけて作者の脂の乗りきった時期に書かれたものである。主題は

出版の年に始まるが、本書には以後、一九九二年現在に至るまで、日本で発表・出版された数多くの翻訳、作家作品論等が三編(第一部 一次文献「作品」(英文)及び翻訳、第二部 二次文献「研究論文」(英文)、第三部 二次文献「書誌、書評、雑誌記事等」)に分けて収録されている。各部に収められた項目は「すべて出版年順に並べられ、「日本におけるスタインベック受容の歴史をたどる一助ともなる」よう意図されている。研究書、論文の類は

現在が組織の時代であり、民主主義の時代である。組織の高度なことを期待してやまない。

いまキャンパスに溢れている受験生には、どんな春が待っているだろうか。今月は特に受験生にも読んでもらおうことを考えて、紙面を創って見た。受験生へのアドバイスのほか、関西大学についてさまざまな情報や、時代の変化に対応する大学改革の展望などの記事を掲載している。どうか風邪に注意して、充実した力を発揮して下さい。

英語「コミュニケーション」クラスの開講について

教養部長 鏖坂 真

かねてから外国語教育の改善・充実について、種々検討されてきましたが、その一部として、平成五年度より「英語コミュニケーション」授業が開講されることになりました。これは従来の訳読中心の英語教育だけでなく、聞き話すコミュニケーション能力の教育を充実させようという意図があり、それと併せて、日常会話の上達程度ではなく、外国人とかなり高度の内訳について討論できる能力を養おうとするものです。そのため授業担当者にはネイティブスピーカーの講師を委嘱する計画が立案され、具体的には平成五年度入学の一年次生を対象にして、第一部各学部四・五クラス程度、第二部二クラス、全学で三十クラス程度のコミュニケーション授業を開講して、初年度は前記のとおり、第一部・第二部全学併せて三十クラス程度の開講を予定していますので、もし希望者が数多くあつて当てることのできるようになるものと思います。

二月は一年中でもっとも寒い季節のように思う。数年前の入試のときも珍しく雪が降って、キャンパスを一面の白い世界に変えてしまったことがあった。

編集後記



今月の表紙

森井 暉(もりい・あきら) 教授 専攻は刑事訴訟法。証拠法や陪審制が主たる研究領域。狭山事件・甲山事件などの裁判事件でも活躍。